

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	十一月の夜 : 文苑
Author(s)	葉生
Citation	龍南會雜誌, 134: 29-41
Issue date	1910-02-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5844">http://hdl.handle.net/2298/5844</a>
Right	

## 文苑

### 十一月の夜

葉生

自然の上には悚然として恐る可き嵐が起つた。冬の前驅を壯にする其の嵐は憂愁に埋もる秋の野に搖落の悲聲を送り、枯れし葉の惱の色は風に迷ひ、路上の花も悲しく破られて透るやうな一種明白の悲哀が恰も蒼ざめ疲れたる毒婦の唇のやう音楽と色彩との匂ひに富める戀人の微笑に咲きし紫の一把の葦を擁す燃ゆる紅蓮の血潮に徐觸れんとする時に歡樂の記憶に惱む一人の男は田圃に面せる書齋の窓に倚つた。

殘照がすかに濛の死せるが如き冷き水に幾分の熱氣と色彩とを與へ十一月の大空を飛騰せる木の華はその凋落を迎ふる靜かなる水の面に悲しき皺を刻むだ。個人的な色にその雋秀を誇つたダリヤの花は傍らの廢園にうなだれて昔の面影はない。物象皆灰色に徧せる素枯の野にあはれ優しき情調を見出さんとした此の若き男の拘泥は苦痛に終つた。大氣は澄んで冷やかなる素絹の觸感を與へる。雨が歎むだ宵の口、四憐を立ち罩めた霧は此の悲しき晩秋の日にも薄絹の被衣に艶冶の姿を包むだとも見ゆる。その引きづる下駄の音ではない……遙かに國境の連山の中に走る弓手の街道を馬車馬の驅かけるにつれて起る響の切迫せる律侶と正確の糸に繋がる、車輪の音が

『から……から……から……』と

虚空に冴ゆる。

男は此の引きいれらるゝやうな細き、強き、また寂しい音律の樂譜に己が心の琴絲を顫はし絶間なき己が心の悲しみ、蓋ふべからざる心の缺陷空虚を思ひ 襤褸た安息かりし嬉かりし歡樂は唯一時の夢で総ては豫期せなかつた己れが逆卷く旋風の渦卷に投せられたるものゝやう猶書齋の窓に倚つて讀み終つた小説——UNE VIE——の最後の句を想つた。

『人生と云ふものはハの見るやうに左程悲しいものでもまた嬉しいものでもない。』

強かつた晝の風が暮れ逝く日と共に吹き止むで青白い空の光が朧げに覗き出した。次第に淡くなうとする霧が烟のやうに搖いて黒い雲が眼よりも高い水平線に烟突の烟のやうに蟠まつた。——と男は自然と唯二人對座してゐるやうな感にあつた嚴酷な冷やかなる自然——世界最後の人が呼吸をどる時に於ても其の爲に木の葉一つ落さぬと云ふ自然の靈の前に裁判せらるゝ罪人のやうな氣分にもなつた。人の理想、運命、秘密に不關焉と唯その行末をのみ呪ふその態度がいかにも冷かに感せられたがそれは——“Never did betray

The heart that loved her; his her privilege

Through all the years of this our life, to lead

from joy to joy.”

男は此のある詩人の章句を想ふて軽く微笑まれたが『不安な歡樂なる』一語は電光の如くきらめい

てアイロニカルな微笑に變せざるを得なかつた。

『たい藤川。居るのがいい』とやつて來た家入のブツキラ棒な鏗聲が聞えた。藤川とは此の男の姓なのだ。安價な焼杉の下駄をぎよ、くしく引づり乍ら遠慮もなく上つて來た。

『飯を食つて一時間程まつたよ』と藤川が云つた。

『失敬々々、君のところに行かうとしてゐるとねエ高田の黒奴くろはなが來あがつて例の御談義が始まらうとしたので危いところを約束があると云つて逃れて來た』と白い息を吹いた。家入の貰の煙が紫色に淡く洋燈を取りまいた。火桶の赤い唇が青い燐を出して嘗めすつた。

『昨日のクラス會はどうだつた。面白かつたのかい』と藤川は寂さうに笑つた。

『うむ。……仲々盛だつたよ、何しろ天氣が悪かつたので大勢は來なかつたがねエ餘興か仲々振つてたよ——殊に笹原ねエ彼奴あいつの長唄と來ちあ盃壓卷の出來だつた』と一呼吸して『………鐘に恨みはかすかすござる（テン）初夜の鐘をつくときは諸行無常と………なんか道成寺のね凌ねときてゐるのだもの而し後では聲が枯れて拙かつた』

洋燈の光が黄ろく骨だつた家入の顔を照らして大きな眉が殊に濃く見えた。廻かな高臺を越ねて消魂しい氣笛の音が絹を裂くやうな聲を立てた。物象皆取鎮めるやうな冷さの中に沈んで行く。……

『先生は』藤川か問ふと、

『來たよ。俤で』と答へて上げた家入の眼が藤川のそれと出合つて二人は何となしに微笑むだ。

が家人は意味ある笑に變じて明かな誤のない神秘の意味を先づ會得させやうと思つた。

『何したんない。近頃は葉さんの話も頓斗聞かないね……………意氣消沈なのかい』

『まさか』と藤川は黙して答へまいとした。翻弄的な彼れの態度が何だか厭な印象を與へた。

『日々に君を戀へども吾が眼に絶わて歡樂の光を見ず……………たぶんさうだらう』家人は詩の文句を引張り出した。

『否……………今の間何も云ふまい。言つたところで言ない今の心持ちさ！それに聞き手が例の無情漢とまであるからね』

『打ては美妙の響あり。一圖に暖爐のやうになる君には冷鐵の心持ちは解るまい』樗手の文句が走り出した。

藤川は黙つてゐた。先夜の女との散歩がありありと眼に浮んだ。

前の前の日の夜。四邊の物象は皆夜の靜寂をまもつて嵐の止むたそのあとに眼の前に魂も消ゆるやうに悠々と起つた霧が壓して來てひそやかに——なよびやかに——ふつと面をかすむるその搖蕩にもかすかに木の葉がたびわて露置く前の冷たさが身に沁々と感ぜらるゝ時分に二人は田圃に出る村路の傍の樟の木の根に落合つた。樟の木は小さい天神の叢祠の横に生へて夏の頃などは茂つたその梢が村路の上に覆ひかぶさつて綠葉の空洞をなすのである。

『遅かつたのねエ……………約束の時間を二十分も過ぎてゐるわ』と女が先づ蓮葉な豊かな肉付のい

、聲をかけた時に男は寂しい妄想を去つた美しい幻像の中に迷つてゐた。それから二人は町に出た。

紅粉胭脂を粧ふた街道に立ち並ぶ電柱、赤や青のペンキ塗りの看板、高く低く女神の寶冠ほうくわんの輝きと見る群星の色、變幼出沒とも云ふ可き仁丹の廣告の暮色電燈は痛切なる生の懊惱に惱む都市の怨訴、文明の嗚咽とも云ふ可き機械の軋む音、商人の掛聲、ヒステリー性の夜店の篝火、金に病む蒼白い地獄の歸り人のやうな顔を普遍に照らして慈愛ある香の女神の輝光を偲おもはしむると共に希望の實現に對する歡樂の溢漲せる新たなる二個の面——男と女の——に對する世人の眼はどれも生に觸れざる幻像を追ふ其のローマンスに向ひ「後悔あいますな」と異様に輝くのであつた。

女が云つた。

『人の眼の焦點が私達二人に集つてゐるやうで氣がどがめるわ』

『全く氣のせいだ』男は唯是だけしか云得なかつた。

二人は花の宮殿を水色の單衣に珊瑚の冠を戴いてくつきりと白むた襟領に微風に飄らるゝ後毛を散らして艶麗えんれいしい素足の搖ぎかすかに胡蝶の氣輕さを味ひ乍ら練ねりりあるき譬へば靜かに上る水蒸氣を見て唯一人湯槽の中に横はり云ふ可からざる満足の調を帯びて総て感覺が爪先よりぬけ出る時の如き穩かなる靜調を味つた。

男も女も何も云得なかつた。唯今の時の連續をのみ思つた。活動寫眞の樂隊が騒々しく二人の前を過ぎ行いた。目の眩む様な電燈の多い町に出た。女は心持ち男に後れ男とつれたつのを恐るやう感

情の發作もあつたがそれけ濱の眞砂の中の金粒である。たゞこの二人の間に人知れず現れた壓氣樓を凝視<sup>めいし</sup>てゐた。彫刻した花飾りのやうな少さな裝飾は二人の眼には勿論入らなかつたのである。

いつしか寄席の前に立つてゐた。中から觀客の拍手の音が海邊の浪のやうに聞えた。「大坂娘義太夫」看板には慙うかいてあつた。

『這入らうかな』男は聞かれぬ位に云つた。

『ね？、何て云つたの』女が問ひかへした。

『壺坂があるさうだ 入つて見やうか』

『ねエどうでも』女の云つた態度が優しく妙に男の眼をひいた。

『何を呆然してゐるのかい』家入が沈黙を破つた藤川はもう何も話したくなくなつて『土曜の夜悠然話さうぢやないか來給へ』とつい辯じた先日の情ある聲を熟々と悔いた。そうして慙う言つた。

『僕あ何だか寂しくつてたまらない！』

『どうせ葉さんのことだらう。戀と云ふものは見てゐる者のやうに吞氣なものぢやあるまいよ』

家入はさも言つたと云はぬばかりの顔をした。藤川はまた癪にさはつたが寂しく笑つた——慙う云うときに此の男の笑方は嚴しいやうな柔しい様な笑だ。軽く瞬たきし乍ら口を開けたり閉いだりして重ぐるしい調子でやり出す。

『…………… 僕は白狀するところ悲觀してゐるんだ。心の中に大きな穴でも出来て其の中を風が吹

き通すやに寂くてたまらない。そうして僕は是れは人に己れが解せられないからだと思ふ。積極的に言つて見れば自己を他に發見し得ない悲だと思ふ』

『は、は、………そうすると此奴愈戀してゐやがるな。面影のみに満足し得ない君の心持が好く解る』

火桶の火が下火になつて冷さが室の四隅から襲ふて來る窓の外で何物か泣くのが聞える、家人は言を續けた。

『其の窮境に陥つてゐる君の寂さは勿論、僕が自分に對する責務を否定し得ないと一般だ君近頃は何麼物を讀んでゐるかい』と「Phlegmatic」な笑を漏して肩を二三度揺ぶつた。

『今例のオン、ゼ、イブを百五十頁程見たばかりだ』それも面白からう、而し僕の考へる所では君には——少なくとも今の君には徳川時代のローマンチックな情死文學でも讀みなをし給へ。いくらか寂さを醫すことが出来るかも知れんいゝや屹度興味が湧くに相違ない「解せられざる吾」が到る處寫してあるではないか。——而し解せられざる吾がいつがな解せられたとて満足が出来るものではないよ。』

『僕はかう思ふ』家人がまた續けた。『心の寂さといふものは表面の波動だ。——個性が起す表面の波動だ。近代的煩悶は求めて得ざる此の寂さと君はいつやら云つたが、それは誤解だ。個性だ個性だ何で單純な情愛の失敗が自我の覺性を惹起し虚無的な思想を誘ふことが出来やう！』感情がさも興奮したやうな態度で熱し來つた頭腦を兩手に抱へた。



『心のごん底に人知れず横つた個性が第一義に働き得ない悲みと云ふのかい』と藤川は唯是う云つて黙つて口を噤むだ洋燈の油煙の燃ゆる音がヂウヂウと沈黙な二人の頭を冒かしてゐる。母屋の方で碁を圍む人の碁石の音がバチバチと聞ゆる。遠くに犬の子が泣く。

『畢竟さうだ』家入は貰の煙を胸深く吸ひ乍ら酔ふたやうな氣分になつた。

藤川は家入の今迄での言葉を想ひ合せて自分の戀に對する耻辱のやうにも感じた。それと同時になよやかな女の姿が頭の中に動き出した。

秋の日の眞晝。清水は斷崖の罅隙から流れ出て小さいけれども深い潦になりながら聞くことの出来ない位の音をたてゝ水が川に流れ落ちる。その上の芝生の上に男と女とは踞むだ。

後は山で、前は開けた田畑で大きな棕の木と樅の木とが二本向ふの川岸に立つてゐる。稻刈つたあとの黒い土の田が限りなく遠くに開けて棕の木に飛んできた鳥が一しきり啼いた。

『先日の寫生は出来たのかい』男が先づ云つた。

『ねエ大抵出来た積りなんですけれど成つちやゐなくつてよ』女は岸の枯草の水に燐らるゝのを見てゐた。そうしてまた云つた。

『全体の調和が少しも取れぬので萎泣きなくなつたわ』

男が爪先きで落した小石が水面を碎いて男の影と女の影とが一所になつて揺れた。

『私に呉れないかい』男が云つた。

『耻しいわ……彼麼ものを。』

『だつて、いゝだらう』

女は黙つて他のことを考へてゐた。その後男は雑誌で見たアンリイ、マチスの畫論をさも自分の創見でも語る氣持ちで全体の調和のとれぬのは拘泥しむがら自然を引き寫しに寫すからで畢竟自分の寫さうとする形象を見極めることの足りぬからで調和がとれぬ。畫面を主宰する色調は其の時のエキスプレションを最も好く表はし得るものでなければならぬ。曖昧なる感じから入るので初めの氣分と後の氣分とが矛盾して畫畫を一變さすのだと説いて、『今純白の紙片の上に一點の墨を點して是れをかなり遠くに離しても其の黒點は明かに見ゆる。當り前のことである。ところが此の黒點の脇に一點を加へる、又三番目のを點じて見る、既に錯覺が起きて來る。若し最初の點の價值を保存しようとするれば後から加へる黒點の數に準して是非とも是れを大きくして行かなければならぬ。』と同氏の畫論の比喩を其のまゝに語つて、是を歸納的に思考して演釋的に畫板に向はねばならぬ。畢竟強い感じからでなくては駄目だと語つた。女は黙つて聞いてゐた。歸りには男は女の手を平氣で握り乍ら歩いた。四邊の遠く近く時たつた山々は無情な原始的な力に雄大と威嚴との中に漲つて眼の前に逼つて獨立、不羈、昂の氣は野より上ることも見ゆる。

『自然は冷酷だ、相互人間はその温き心に此の冷酷を過る可く余儀なくせられてゐる。』男は恁う思つた。

川に沿ふて二十分も歩いて土橋の上に立つて廣濶な野を見てゐると輕鐵の工夫がツランシツトやテ

「ブをもつて盛んに測量してゐた。傍に五六人半纏着の工夫は一人の女を圍んで戲けたゐた。

『どうして御前はそんなあさましい姿になつたんだ』と工夫の一人が云つた

『あさましいつて何かい、淺間山かい、淺間艦かい……あゝ誰れだつたかな軍艦は十錢で三艘出来るて——』

工夫等は無濟慮に大きい口を開けて笑つたが遠くに赤白塗分けの測量標をもつて立つてゐた男が『た——い』と聲をかけたので話し合つた様に彼方を向つた。そこに歩みよつた男が女に話しかけた。

『例の豆腐屋の東隣りの狂人なんだ』

『あら、この人なの……可愛さうに二人も同時に小供を失つたてね』

『每晚小供のことを思ひ出して泣いては親爺に打たれるよ。黄ろい悲鳴をあげてねエ……』

『家の人は何してゐるの』

『小作人』と男はまた先の女を振りかへつて。

『私達だつてまるで狂人のやうにも思はれて居るんだ——二人は』

『かもわなないわ。思つてゐる人には思はせるだけよ』

男は唐突情愛の勝利の聲を聞いた。

家人は新らしい責に火をつけて言出した。

『人に理性的な人間と非理性的の人間がある——バアナードショウの言葉だ——前者は自己を世に近け後者は已れに世を近くる人ださうだ——譬へば』

家入の語を遮きつて藤川は

『だがそれは吾々當面の問題でないぢやないかそれは天性の説明なんだ理性的非理性的それは生れた時にごららか踏まねばならぬ道であつた。さうだらう』

『……………』

『昔は殿様と親父だげと云つた廣田先生——三四郎の——の所謂露悪家になれさわすれば君は文句は無いんだらう』

『うむ見て見ぬ振をする虚偽者や金箔ではつた偽善がある間は露悪家も出るさ！』家入は心の深い底から押へ難い身のもろさを感じる時のやうな態度で云つた。

『誰も虚偽や偽善は厭ひたが此の二者が少くとも幸福を興へる間は全く是れを否定する譯にも行かぬ』

藤川は理想家である。美しき多くの夢美しき多くの人を描かんことにのみ生きてぬる男である。どんなでもない幻像に興味を覺える人間である。詩を詩として見る男ではなく是れを現實世界に信を置く所に興味を保つ人である。寂しい心に度々襲はれることもあるが空想と憧憬とは青年の二つの翼であると思つゐる輩だ。「藝術の爲に一身を捧ぐ」と曖昧な昔の隠遁者のやうな觸れない顔の動物である。ある人は彼の議論を論理的遊戯だと云ふ人間があるか眞實彼れは可愛い動物である。人の依頼

を斷ることの出来ない位美しい感情家である。随つて陋い生活を續くこともあり女に好かる弱い服従家でもある。

『露悪家だとか個性だとか言つて聞かせられると僕あ刀の切先でも突きつけられた様な感じがする………全くだ』と藤川が云ふと、

『さうぢやないかヒリヒリして好い心持になるよ。総体人間は鈍角よりも鋭角の人間が好いよ第一感情を偽らないで痛快だからな』と家入が答へた。

『だが………』藤川は何が言はうとして三たび女のことを想つた。

正月の歌加留多會のときである。

洋燈の中に十四五人も圓坐を作つた。

男の向ふに女が坐つてゐた。

男は何だがうれしかった。

男が敗けた罰に軽く吟して聞かしたときに女が嬉れく笑つた………美しい顔が崩れて體を斜に海棠のやう………

其の時の眼………鼻………』

『いゝ聲だこと！』と女が讀めたその聲。

二人は話に飽きが來た。火桶の火も白く灰になると時の刻む音が有聲にまざる淋しさを誘つた。最後に家人は慫う言つた

『これから曉星に一杯飲のみに行のて樂觀しやうぢやないか』

二人はそれから肉を食ひ酒を飲んで話した。時計の針が十二時に回る頃曉星の角を出た時には蒼白い月が寂しく枯枝にかゝつて、河の流れの音が静かな夜の空氣を破つた。

『要するに人生は大洋の渦だ。巻き込まれないで行けば幸さ!』と家人は外套に身を轟と巻き乍ら云つた

か藤川は何とも答へなかつた。樹立に透いて見ゆる月光の影をかはして顫ふ並木の葉を無心に振りかへて『明日は女と會ふ日だ』と思つた。蹺音が高塀の彼方に響いて十一月の一夜は更けて行く……

(二月六日稿)

## 鐵 鎖 と 鐵 槌

水

郷

大きな丘の頂を目懸けて、大勢の若い人が、一心に馳け登る。息の續く限り、足の續く限り、押し合ひ、へし合ひ、我先きにと走る。

丘一面、短い灰色の草である。